降臨節第１主日　　ローソクを増やしてゆく話。　　２０２４．１２．１．

今日から降臨節に入りました。大斎節のように花を飾らず、紫の祭色で礼拝しています。降臨節のことを英語ではアドベントと言って、何かがやってくること、『到来』を意味する言葉です。

それじゃ何が来るのか。ひとつは、イエス様の誕生を祝うクリスマスがやってきます。その準備期間です。そしてもうひとつは、世の終わりに、イエス様がもう一度雲に乗って来られる。その準備をするのが、この期間の目的です。今日の福音書は、どちらかと言うと、世の終わりを意識した内容でした。そして、そのテーマは、『世の終わりには、いろんな天変地異が起こって、不安に陥るだろうが、それは救いが近いことを表しているしるしだ。』だから、最後まで耐え忍ぶ者は救われる、という、２週前のテーマになるのですが、今日は最初の、イエス様の誕生を祝うための準備の話をします。

私たちが礼拝の初めにローソクに火を点すのは、どうしてでしょうか。それは、光が聖書の初めに出てくることと関係があります。

聖書の初めに、神様は天地を創造されましたが、その第１日目、地上が混沌として、闇が覆っている時、神様は、『光あれ』と言われました。そしてこれを振り出しに、世界の秩序が整いました。そしてまた、ヨハネによる福音書の最初で、イエス様の誕生について、『その光は、まことの光で、世に来てすべての人を照らすのである。』と言っています。そしてイエス様が天に昇られた後、１０日過ぎて、『突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。』と書かれていますし、パウロがクリスチャンを迫害しようと、ダマスコに近づいたとき、『突然、天から光が彼の周りを照らした。』と書かれています。

私たちが礼拝の初めに、ローソクに火を点すのは、神様が世界を創造されたこと。また、イエス様として、あるいは聖霊として、私たちと共にいてくださることを、私たちが思い出すための、象徴的な行為なのです。

今日からクリスマスまで、４回の日曜日を過ごします。それで、私たちはこのような火を点す理由のほかに、特別な意味を込めて、一つずつ毎週点して行きます。１２月というのは、途中に冬至もあって、一年で一番夜の長い季節です。そんな時に、ローソクの数が増えてゆく、というのは、また明るい太陽を待ち望む、希望を持ちながら待つことを意味しています。

降臨節に、一本ずつローソクを増やしてゆくのは、イエス様が誕生するまでの、聖書の歴史をわたしたちに思い出させるものです。

降臨節第１週の蝋燭は「約束のキャンドル」と呼ばれるものです。これは、アブラハム、イサク、そして他のイスラエルの人々への神様の約束を表わします。彼らの子孫を通して、すべての人々が、祝福される、という希望を、神様はアブラハムたちに約束されました。今から４０００年前のアブラハムなど族長への約束を思い出させるのが、最初の蝋燭です。創世記までさかのぼる聖書の最初の歴史ですね。

第２週は「預言者のキャンドル」。偉大なる大祭司であり、預言者であり、王であられる来たるべき救い主メシアを予言した、イスラエルの預言者たちを表わすそうです。広い意味では、イスラエルの人々をエジプトから脱出させたモーセも、預言者に含まれるかもしれません。しかし、王様や祭司と区別して預言者が出てくるのは、今から３０００年くらい前のことです。

イスラエルには、サウル、ダビデ、ソロモンなどの王様が出てきましたが、王様より先に、預言者サムエルが登場します。彼が、サウルやダビデに油を注いで王様にしたのです。その後、ダビデを叱ったり支えたりした、ナタンという預言者がいました。彼らは、王様以上に権威を持っていたのでしょう。

その後、国が南北に分裂すると、それぞれに王様ができます。特に腐敗が進んだ北イスラエル王国には、外国の宗教や偶像を取り入れる悪い王様が出てきましたので、神様は、エリヤ、エリシャなどの行動する預言者を送り込みました。彼らは、王様と対決したり、多くの奇跡で人々を救いました。

しかし、そのうちに王様の力が強くなってしまって、とても行動では、預言活動ができなくなってきました。そうなった時、神様から言葉を預けられた預言者たちは、書物にそれを書き残すようになりました。北イスラエル王国に、アモス、ホセアなどの預言者が出た頃、南ユダ王国には、イザヤ。そして時代が下って、エレミヤ、エゼキエルなどの預言者が出てきました。

そして、南ユダ王国では、最後の預言者マラキの時代まで続くのです。マラキは、その書物の最後、つまり旧約聖書の最後に、大いなる恐るべき主の日が来る前に、預言者エリヤが遣わされることを語っています。これが、新約へと結びついてゆくのです。

さて、第３週は「バプテスマのヨハネのキャンドル」。イスラエルの民に救い主がじきに来られると告げた、バプテスマのヨハネを象徴するそうです。そして、イエス様は、このバプテスマのヨハネこそが、マラキが語った、主の日に、メシアに先駆けて遣わされる預言者エリヤのことだ、とおっしゃったのです。

そして、クリスマスの直前、第４週は「マリヤのキャンドル」。「救い主が生まれる」と、天の御使いが告げたよき知らせを、マリヤが信じて喜んだことを思い起こさせるものだそうです。預言者のイザヤが、７章１４節で、『それゆえ、わたしの主が御自らあなたたちにしるしを与えられる。見よ、おとめが身ごもって、男の子を産み、その名をインマヌエルと呼ぶ。』と預言したのは、このマリヤのことだったのです。

このようにして、最初暗かった世の中が、だんだん明るくなって、イエス様の誕生を祝う準備が進んで行くのです。実際には、最初の頃より、イエス様の誕生の頃の方が、社会は暗い、辛い時代だったと思われますが、社会が暗いほど、救い主を求める人々の思いは強くなって、時が満ちるに及んで、イエス様の誕生となるのです。四本目の蝋燭が点る頃には、クリスマスが来た、という気分になります。

そして、クリスマス当日は、四本のキャンドルの中心に、５本目の、キリストのキャンドルが、イエス・キリストが世の光であることを表わす、ということになるわけです。

以前、神学校で働いていた時、降臨節の準備をするのに、４本のローソクを買いに行ったことがありました。私はそれまで、ローソクは、同じ色のものを４本並べることしか知りませんでしたが、韓国から来た司祭に、ローソクは、４色揃えて買ってきて欲しい、と頼まれました。１週目は紫。２週目は赤。３週目はピンク。そして、４週目は白だ、と言うのです。そんなもの、揃えて売っているだろうか、ちょっと疑問に思いながら、最初はカトリックの店。上智大学の近くに行ったのですが、４種類揃えて売ってはいませんでした。ところが、その後、銀座の教文館というプロテスタントの店に行くと、４種類のローソクが箱に入れられて並んで売られていたのです。ああ、このような伝統もあったんだなあ、と思いました。

そして、ローソクを点す目的の話を改めて思い出したのです。

世界が造られた時の混沌。あるいは、人類の最初の堕落の物語から始まった暗黒の時代から、だんだん希望の光が輝いてくる。それは日の出前の、深い紫の空が、赤くなり、ピンクに変わり、やがて白い明けの空に、太陽が登ることを、蝋燭の色が象徴しているように、私には思えました。

今日は、降臨節に入ったので、イエス様を迎えるために４本のローソクに順番に火を点してゆくことについて、お話しました。イエス様の誕生まで、アブラハムたち族長への約束。イザヤやマラキなどの預言者たちの言葉。そして、新約に入って、預言者たちが語ったことが、バプテスマのヨハネ、おとめマリヤの上に実現していったことを、思い出しながら、イエス様の誕生を祝う準備をしてゆきましょう。